

透析患者の臨死期における家族の悲嘆・死別に対する

多職種チームでの取り組み

長崎腎病院

○田中奈留美 山中真樹子 丸山祐子 一ノ瀬浩 原田孝司 船越哲

【目的】

当院で臨死期を迎えた症例を通じて、透析患者家族が喪失の現実を受け入れ悲嘆の苦痛を乗り越える過程の支援を検討する。

【症例】

70歳代男性、妻と二人暮らし。2012年血液透析導入。2014年7月肺癌を発症、治癒不能と診断され、癌に関する治療は希望されなかった。同年11月体動困難で入院、緩和ケアのサポート体制となった。本人・家族の希望である苦痛の緩和と夜間睡眠できる事を目標とした。呼吸器科医師の指示により麻薬を内服から貼付薬・点滴へ変更し、薬剤師の助言を受けレスキュー量等を調整した。外来で担当していたMSWは妻と面談し不安の訴えを傾聴した。また、病棟スタッフはケアリングの要素を意識し寄り添い続ける対応を行った。本人希望で透析の見合わせとなり、14日後に永眠された。

【考察】

臨死期において、家族が悲嘆の苦悩を乗り越えることができるよう寄り添い続けることが重要と考えるが、マンパワーの問題は深刻である。今後はサポート期間を推定しながら緩和ケアをする状況も必要かも知れない。